

特集

令和6年度版 小学校「道徳」

新しい『きみが いちばん ひかるとき』を紹介します!

いよいよ、令和6年度版の新しい教科書が完成しました。
これまでの教科書を厳しい目で見つめ直し、子どものために、先生のために、
教科書に何ができるかを問いながら、磨き上げてきた教科書です。
今回は、教科書作りにご尽力いただいた、編集委員の先生方に新版教科書をご紹介します。



道徳科教科書は、子ども一人一人が自分らしい心磨きをするための宝箱

田沼茂紀

令和6年度から、道徳が教科になって7年目に入ります。教科書の発行も3回目となりました。教科化当初は、教科書教材の使い方や学習評価にとまどいが見られましたが、どんなふうに学びをつくれれば、一人一人の成長の見取り(学習評価)ができるか、ということについて、各学校現場で着実に実践が積み上げられてきたように思います。

いっぽうで、教師主導の価値伝達型の授業が、まだまだ多いと感じています。「令和の日本型学校教育」で目指しているのは、「個別最適な学び」と「協働的な学び」です。子どもたちが自ら価値を探究していく道徳科授業、すなわち、「主体的な学び」ができているかを、今、再点検することが必要ではないでしょうか。

光村図書の新版教科書は、原点に立ち返り、子どもたちが教材を通して学び深める中で、どのように主体性を発揮し、自分自身を見つめていくのかをじっくり考えながら、作り上げてきました。

道徳科の学び方とは

学習指導要領では、「道徳的諸価値の理解」をもとに、「道徳的な資質・能力」を培っていくことが述べられています。道徳的な資質・能力を形成していくことによって、道徳的諸価値の理解もいっそう促進されるのです。教師主導で道徳的価値の理解のみを追求するのでは、受動的な学びにとどまり、能動的な学び手は育たないでしょう。能動的な学び手となるために大切なのは、「自らの道徳的問いに気づく力」、「自分事として価値づけを深めていく力」、「自分事として納得して価値を受容する力」です。

新版教科書は、こうした、道徳科の学び方(モラルラーニング・スキル)を身につけられる教科書になっています。

例えば、各学年の第2教材には、教材の下段に「道徳の学び方」という特設枠があります(本誌 p.3 図版参照)。その中では、道徳科の学びのプロセスを解説しています。

また、問いを「自分事」として深めるための、思考ツールや、役割演技等の体験的な学習など、個別最適な学び、協働的な学びのための手立てやヒントも随所に盛り込みました。教師が価値を教えるのではなく、子ども自身が、価値を見いだしていく、教材を通して自らの学びをつくることのできる、そんな構成になっています。

学びをつなぐ

学習を「つなぐ」ということも、重視したことのひとつです。道徳科の授業を1時間完結で考えるのではなく、年間35時間、そしてその先へと、1時間1時間がつながっていかなければなりません。「ウェルビーイング(well-being)」というキーワードを目にする機会が増えましたが、個人・集団・社会の、今よりも望ましい在り方を実現していくためには、継続的な学び、つまり、一つ一つの学びを結び付けていく姿勢が大切です。

新版教科書は、年間を緩やかに3つのまとまりに分け、教材を配列していますので、学びのつながりを意識しやすい構成となっています。また、3つのまとまりの中には、光村図書が特に重要だと考える現代的な課題(いじめ問題、環境、情報モラル、共生)を深めるユニット(教材とコラ

ムのセット)も、年間4か所組み込まれています。

このように、学習内容の適切なつながりを考えた配列と構成がなされていますので、もちろん教科書の配列順に使っていただくことも可能ですし、これをもとに、各学校の実態に合わせてアレンジしていただければ、カリキュラム・マネジメントにもより取り組みやすくなるのではないのでしょうか。

道徳科の学び方、学びのつながりといった、全体的な視点からお話ししましたが、もちろん、一つ一つの教材の質の高さは折り紙付きです。まさに、「自分らしい心磨きをするための宝箱」だといえるでしょう。幾つもの学校を回っていますが、道徳科の授業を少しずつ改善していこうと努力されている熱意ある先生方に多く巡り合います。そんな先生方の期待に応えられる教科書になっていると自負しています。

田沼茂紀 ●たぬましげき

國學院大學教授(道徳教育学・教育カリキュラム論)
『道徳は本当に教えられるのか—未来から考える道徳教育への12の提言』(編著/東洋館出版社)など。
光村図書小・中学校「道徳」教科書編集委員。

